

主 題	小学校との交流活動が継続している理由
副 題	—子供たちはなぜ神明園に来てくれるのか—

世代間交流	レクリエーション	研究期間	6 ヶ月
-------	----------	------	------

事業所	特別養護老人ホーム 神明園			
発表者：長川 吉仁（ながかわ よしひと）		アドバイザー：中村 正人（なかむら まさと）		
共同研究者：大内健史 橋本忍 菊田鉄平 中里はるか 佐藤恵 古家野美貴				

電 話	042-579-2711	E-mail	info@sinmeien.or.jp
F A X	042-579-6868	U R L	http://www.sinmeien.or.jp

今回発表の 事業所や サービスの 紹介	東京の西部に位置する羽村市、(人口約 5 万 7 千人) に、市内 3 番目の特養として平成 11 年に開設し、今年で 16 年が経過しました。【地域社会に開かれた園づくり】【『楽しみ』『くらし』～そして『よろこび』】の 2 つを理念に掲げ、全員参加による生活援助の実践を目指しています。日々の様子はこちらでもご確認いただけます。→ https://www.facebook.com/sinmeien
------------------------------	--

《1. 研究前の状況と課題》

神明園ではその理念の一つでもある“開かれた園”を具現化するため、交流事業推進チーム(以下、チーム)を設置し、諸教育機関と連携した世代間交流活動を展開している。

中でも、平成 21 年から市立武蔵野小学校と入居者との交流活動はタウンワークス(以下、TW)と呼ばれ、今日まで活動が継続している。この活動は、小学生にとっては情操・人権教育効果を、入居者にとっては社会性の維持への貢献、また、単純には楽しみや喜びから“生”を実感できる活動として、小学校と児童、神明園入居者すべてに、有益な状況を感じられるものとなっている。

今回、チーム内で TW をさらに充実させるべくプログラムの検討をしたところ、何が我々に期待されているのか?の整理が必要なのでは、との話が上がった。そこで、TW に期待されることを把握し、活動が継続できている理由を検証することで、プログラムの充実を図ることとした。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

【目標】

児童・保護者・学校は、各々どのような思いで、何を期待して、交流活動に参加しようとするのかを明らかにする。

【目的】

TW の参加児童とその保護者、学校側の思い、期待を理解することで、福祉施設側としてチームの対応の在り方や役割を明確化し、活動内容の充実・展開を検討する思案材料とする。

【期待される成果】

- ①交流プログラムに児童・保護者・学校の三者のニーズ対応を反映させることができる。
- ②参加する児童の参加満足度を上げることで、高齢者（施設）への理解を促進できる。
- ③児童の満足は保護者へ的高齢者（施設）理解を深めることができる。
- ④児童と触れ合える時間を楽しみにしている入居者に対し、活動継続そのものが意義となる。

《3. 具体的な取り組みの内容》

＜参加児童及び保護者へのアンケート実施＞

武蔵野小学校のTW 担当者である副校長先生と相談の上、今年度の参加者49名の児童とその保護者を対象としアンケートを実施した。質問内容はチームで意見を集約し作成した。

＜担当副校長へのインタビュー＞

TW は児童に対してこういった効果を期待しているのか、また、これまで実践してきた感想などから今後の展望についても伺った。

《4. 取り組みの結果と考察》

＜アンケートの回収率＞

- ・児童用 79.6% （回収数 39／配布数 49）
- ・保護者用 83.0% （回収数 39／配布数 47）

児童では、回答者のうち“自分で参加を決めた”という回答が71.8%であった。初めてTWに参加しようと思った理由は「お年寄りと話をするのが好き」「お知らせを見て興味を持った」「前に老人ホームに来たことがある」であった。ここで「来たことがある」に着目してみると、“過去の経験”が動機になっており、その動機を形成しているのは「楽しい」であることがうかがえた。

保護者がTW参加に期待していることは、情操的效果、校外での実体験から得る成長といった要素にまとめられた。また、複数回参加の保護者から寄せられたコメントでは、高齢者との接触が子供の成長につながった実感を得られた、というのが複数認められた。これは、これまで実践してきたプログラムでも、程度の差こそあれ保護者が期待した効果をもたらせたともいえる。

TW は開始当初より武蔵野小副校長が専任対応するスタイルが踏襲されており、現副校長は3人目である。これまでも前任者を含め、情操教育の一環として有意義であるとともに、地域の福祉資源活用として、双方に有意義であろうといった話を伺っており、今回のインタビューでも同様の話をいただいた。担当教諭の異動交代時には後任への引き継ぎを確認させていただいており、活動の継続には歴代担当者と学校長の理解ある対応が、大きく影響していることも示唆された。

《5. まとめ、結論》

神明園では、開園当初から継続性のある交流活動を教育機関に働き掛けてきたが、学校長や教員の異動により立ち消えてしまうことを繰り返してきた。このTWという活動は、すでに5年目を迎えるにあたり、継続と発展が望まれる。そのためには学校側の理解を得て、児童には『楽しみ』となりえる場を提供し続けることが、保護者への働きかけにもつながることが確認できた。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

倫理的配慮において神明園園長の許可を受け、武蔵野小学校校長へ協力の依頼を仰ぎ実施。対象者には、非協力が一切の不利益を生じないこと、回答の個人特定をしないこと、結果は本研究以外に使用しないことを書面にて説明し、本研究に関する同意を得た。アンケート集計は神明園園長のみが原紙を扱い、集計作業後焼却処分済み。

《7. 参考文献》

- ・佐藤晴雄（2002）
学校を変える 地域が変わる 教育出版
- ・文部科学省（2008）小学校学習指導要領
- ・草野篤子ほか編著（2010）
世代間交流学の創造 あけび書房
- ・前原なおみ、長浜明子（2010）
小学生の高齢者観の育成に関する現状報告
大阪教育大学紀要第V部門 58
- ・中村正人、白澤政和（2013）
中学生が高齢者イメージを形成するプロセス
桜美林大学大学院 修士論文

《8. 提案と発信》

少子高齢化が進み家族構成が核家族化する日本の社会では、小学生のみならず子供と高齢者の接点を増やすことに意味があることは、世代間交流として今や多くの場で語られている。高齢者施設が、その機能を介護だけでなく児童教育との一部融合を意識し、地域の教育機関と協働した社会を支える仕組み作りは重要であろう。

【メモ欄】